

[1234]

氏名 (生年月日)	齋藤聖子 (1987年6月21日)
学位の種類	博士(心理学)
学位記番号	文博甲第119号
学位授与の日付	2017年3月16日
学位授与の要件	中央大学学位規則第4条第1項
学位論文題目	優柔不断な人の心理特性と意思決定プロセスに関する研究
論文審査委員	主査 緑川 晶 副査 兵藤 宗吉・富田 拓郎・望月 聡 (筑波大学)

内容の要旨及び審査の結果の要旨

1. 論文の目的

齋藤聖子氏は、これまで「決められない」に焦点を当て、一貫して研究に取り組んできた。特に博士論文では、決められなさを表す個人特性である「不決断」傾向と、決められなさの特性を有した人々が認知的な処理を行うにあたって、どのような特徴を有するのかについて関心を持って研究に取り組もうとしたが、そもそも本邦における「決められない」状態を表現する言葉として一般的に用いられている「優柔不断」と「不決断」は異なった概念である可能性が生じてきた。そこで博士論文では、本邦における「決められない」人々を表す優柔不断の概念を改めて検討した上でその測定を試み、優柔不断となる人々の認知プロセスや、適応的な意味を明らかにすることを目的とした。

2. 論文の構成

第1章 本論文の問題と目的

第1節 決定の躊躇についての研究

第2節 決められないという特性

第1項 決められなさを測定する尺度

第2項 従来の尺度の問題点

第3項 決められない特性と他の個人特性との関連

第3節 意思決定プロセスにおける決められない人の行動

第1項 決められない人の決定場面における行動

第2項 不決断の要因モデル

第3項 意思決定プロセスモデルにおける決められない人の行動の位置づけ

第4項 本論文で検討する課題

- 第4節 本論文の目的と意義
 - 第1項 本論文の目的
 - 第2項 本論文の独自性と意義
 - 第3項 本論文の構成
- 第2章 優柔不断とは何か？
 - 第1節 本章の目的
 - 第2節 優柔不断な人のイメージの測定（研究1）
 - 第3節 本章のまとめ
- 第3章 優柔不断尺度の作成と妥当性の検討
 - 第1節 本章の目的
 - 第2節 優柔不断尺度の作成と因子構造の検討（研究2）
 - 第3節 優柔不断尺度の妥当性の検討（研究3-1、研究3-2、研究4）
 - 第1項 優柔不断尺度と既存尺度との関連（研究3-1）
 - 第2項 優柔不断尺度と既存尺度との関連（研究3-2）
 - 第3項 優柔不断尺度と商品選択課題における選択時間との関連（研究4）
 - 第4節 本章のまとめ
- 第4章 優柔不断は適応的な特性か？
 - 第1節 本章の目的
 - 第2節 優柔不断な人の決定時のストレス（研究5）
 - 第3節 優柔不断と衝動性（研究6、研究7）
 - 第1項 優柔不断な人の衝動性（研究6）
 - 第2項 遅延割引課題における優柔不断な人の衝動性の検討（研究7）
 - 第4節 本章のまとめ
- 第5章 優柔不断な人の意思決定
 - 第1節 本章の目的
 - 第2節 優柔不断な人の情報探索数（研究8-1、研究8-2）
 - 第1項 くじ課題における情報探索数（研究8-1）
 - 第2項 くじ課題における情報探索数（研究8-2）
 - 第3節 優柔不断な人の情報探索方略（研究9）
 - 第4節 優柔不断な人の情報探索前の行動（研究10）
 - 第5節 優柔不断な人の選択肢評価（研究11）
 - 第6節 本章のまとめ
- 第6章 総合考察
 - 第1節 本論文の結果概要
 - 第2節 優柔不断な人の意思決定プロセスのモデル構築

第3節 本論文の総括（結論／課題と展望）

第1項 結論

第2項 課題と展望

引用文献

謝辞

付録

3. 各章の概要と評価

第1章 本論文の問題と目的

第1章は、文献研究によって決められない状態に関する研究の概要とそこから導き出される問題と方向性が記述されている。

冒頭では、意思決定研究の中でこれまであまり焦点が当てられることが無かった「決められない状態」である「決定の躊躇」に着目して文献的な検討を行った。決定の躊躇についてこれまでの研究を概観すると大学進学や進路選択などのように心理的な負荷が高い場面に関しては検討されてきたが、日常的な些細な事象についての検討はほとんど行われていないことが明らかとなった。また、決定の躊躇に関する背景には、選択肢の数といった課題の性質などの外的要因と決定者の性格特性や感情状態などの内的な要因が指摘され、認知面については決定の遅延や視野狭窄などのように決定者の内的な処理プロセスや知覚過程に特徴があることが明らかとなった。これらの背景やプロセスを含めて、「些細な事象における決定の躊躇」について検討することを論文の目的とした。

次に、決定の躊躇において生じている問題に焦点を当てると、複数の要因が関与していることは明らかであるが、個人特性によって大きく異なる可能性が示唆され、決定の躊躇に関する個人差を抽出することが必要と思われた。そのため決定の躊躇を測定する尺度について文献的な検討を行った。これまでの尺度を外観した中でも多くの研究で用いられ、本論文で検討しようとする事象についても測定できる可能性高い尺度として「不決断尺度 (indecisiveness scale; IS)」が抽出された。しかし不決断は複数の要因により構成された概念であると考えられるが、不決断尺度は1因子から構成されていること、および本邦で用いられている決定を躊躇する個人特性を表す用語である「優柔不断」は不決断とは一致しない概念であることも示唆された。そこで、その後の研究において本邦で用いることが可能な尺度を作成する必要があるという結論に至った。また、不決断についてはその要因に関する既存のモデルはあるが、認知プロセスに関するモデルは確立されていない。そこで本研究では意思決定プロセスのモデルを参考に不決断に関するモデルを作成することとした。

最後に、決められない状態がストレスや自己効力感の低下につながるといった適応の問題にも発展する可能性が示唆された。そこで決定の躊躇が適応過程にどのような意味をもたらすのか検討することとした。

本章の評価として、決められない状態に関して、個人特性や認知プロセスなど多くの研究から多角的に検討している点、さらには本邦で用いられている優柔不断の概念が欧米で用いられている不

決断と概念を異にしている可能性にまで論及された点は秀逸である。

第2章 優柔不断とは何か？

第2章では、第1章で指摘されたように「優柔不断」が本邦における決められなさを規定する概念として適切か否か、また「不決断」との相違について尺度を構成する中で実際に検証した。実施した研究1では、優柔不断についての概念を整理するために面接調査を実施し、優柔不断の概念について明らかにした。その結果、優柔不断な人についてのイメージとして「決められなさ」「熟慮」「他者に対する行動」「不安」の4つのグループが見いだされた。このように優柔不断の概念を整理すると、不決断と重複する部分もあるが、「他者に対する行動」が見いだされたように、本邦独自の意味合いが含まれることが明らかとなった。これらの結果からも、優柔不断の概念を測定する尺度を作成する意義が見いだされたと言えよう。

本章では、第1章の文献研究だけではなく、丁寧に面接調査を実施し概念を再検討し、その上で優柔不断が不決断とは異なった概念であることを確認している点を高く評価したい。

第3章 優柔不断尺度の作成と妥当性の検討

第3章は、前章までに整理されてきた優柔不断の概念を測定する尺度を作成し、その妥当性を確認することを目的とした。質問項目は研究1で示された優柔不断の特徴を表し、かつ「熟慮」「不安」「決められなさ」「他者への行動」を含む24項目で構成した。この質問によって構成された質問紙を225名に実施したところ4因子16項目が抽出され、それぞれ「熟慮」「先延ばし」「他者参照」「不安」と命名した。次にこれらの因子の妥当性を確認するために、State-Trait Anxiety Inventory（不安の評価尺度）、General Procrastination Scale（先延ばしの評価尺度）、認知的熟慮性-衝動性尺度（熟慮の評価尺度）、自意識尺度／個人志向性・社会志向性尺度（他者参照と比較のための評価尺度）、Visual Analog Scale（全般的な優柔不断を表すスケール）を合わせて実施し、これらの指標と作成した優柔不断尺度との関連を検討したところ、すべての因子に対して想定された尺度との関連が確認された。このことから作成された優柔不断尺度の妥当性が確認されたと言えよう。尚、他者参照に関しては、他者から見える自分の側面に注意を向けやすい公的自己意識と特に関連が認められたことから、優柔不断な人の他者参照とは、他者からの視点を意識しやすい状態であると言える。次に、実際の選択行動を指標として作成した優柔不断尺度の妥当性を確認したところ、優柔不断得点が高いものは、実際の行動でも時間を要することが確認された。

以上のように尺度を新たに作成しそれを実際の行動により確認した点、優柔不断を構成する下位因子が併存する尺度によっても妥当なものと確認された点など、研究のプロセスだけではなく得られた知見についても秀逸である。

第4章 優柔不断は適応的な特性か？

先行研究では、優柔不断尺度の下位因子でもある「熟慮」と「先延ばし」に相当する概念は、決

定時のストレスという点に着目すると、それぞれ適応的／非適応的という結果が示されていた。そこで本章では、今回の尺度においてもそのような適応的／非適応的の双方が関わっているのか検討する目的で、決定に対する自己効力感やストレスとの関連を検討した。その結果、優柔不断尺度の得点が高い者は自己効力感が低く、決定に対してもストレスを感じていることが明らかであった。すなわち優柔不断な人は決定についての自信が無いばかりかストレスを感じていることが明らかとなった。次に、先行研究では不決断尺度は適応的な衝動性とは負の相関を示し、非適応的な衝動性とは正の相関を示すことが示されている。そこで優柔不断尺度においても衝動性との間での関係を検討したところ、機能的な衝動性とは負の相関を、一方で非機能的な衝動性とのあいだには相関を見ることができなかった。この結果は、衝動的に行動することが最適な状況であっても行動に移すことができない状態と言える。いずれにしても、優柔不断の人は非適応的な状態であることが明らかであった。

以上のように本章の研究は、他の尺度で用いられている熟慮と優柔不断における熟慮が異なる概念であることを知らしめただけでなく、優柔不断な人が非適応的な状態にあることを初めて明らかにした点など、学術的にも臨床的にも非常に重要な示唆を与えるものである。

第5章 優柔不断な人の意思決定

この章では、決定における認知プロセスが明らかな課題を実施し、優柔不断な人の認知プロセスの特徴を明らかにすることを目的とした。実際に用いた課題は、くじ課題（画面上の操作と実物の操作の2種類）、情報探索課題、迷路課題、選択課題である。実施した結果、以下の3点が示された。①優柔不断な人の中でも熟慮が高い人は決定までにより多くの情報を集めようとする。一方で、その行動は情報を多く必要とする課題のときに限られる。②優柔不断な人の中でも先延ばしや不安が高い人は、選択肢を見つけて情報を得る情報探索のプロセスを遅らせようとする。③優柔不断な人は選択肢を1つだけ残す課題のときに困難を感じる。

以上のように尺度によって優柔不断を測定するだけでなく、各種の実験課題によって優柔不断な人の認知プロセスの特徴やその下位要素が意味することまでを明らかにしている点は実に秀逸である。

第6章 総合考察

第6章では、これまでの知見を総括した上で、意思決定のプロセスモデルに依拠した形で、新たな優柔不断における認知プロセスのモデルの構築を試み、最終的に以下の結論を導き出した。①優柔不断は複数の側面を持った特性であり、特にその特徴として、社会的な側面である他者参照を含んでいる。②信頼性と妥当性のある優柔不断尺度を作成した。また尺度は実験的な選択課題での選択時間とも関連するものであった。③認知プロセスに着目すると、「先延ばし」と「不安」が情報探索の遅延と、「熟慮」が情報探索および選択肢評価での情報探索数や決定時間と、「優柔不断」が選択肢評価での選択の困難さをとそれぞれ関連していることが明らかになった。

本章はこれまでの結果をまとめるだけではなく、既存のモデルの再検討を行った上で新たなモデルの構築を行おうとした点で、その努力を認めたい。ただ、参考としたモデルが認知プロセスとして十分に完成されたものでは無かったため、提出されたモデルの弱さは否めない。この点に関しては、引き続き検討を願いたい。

4. 本論文の評価

斎藤聖子氏は、これまで「決められない」に関心を持ち、大学院博士前期課程、後期課程を通じて研究に取り組んできた。その中で、本博士論文はその個人差に焦点を当てたものである。決められない状態の個人差はこれまで不決断傾向として本邦でも研究がなされてきたが、一方で日常的に日本人が用いている同様の概念には優柔不断がある。しかし、心理学研究では優柔不断が概念として取り上げられることは無く、優柔不断の概念上の相違すら議論すらなされないままに欧米の概念から訳出された不決断が用いられ続けていた。そのような背景において、優柔不断を心理学的な概念として整理した本研究の功績は大きいと思われる。特にその中で見いだされた下位因子である「社会的参照」は、決定場面における日本人の心性を表していると考えられ独自性の高い研究になったと思われ、今後の文化的な研究にも発展する余地を残している。

本研究の特徴の第二は、調査研究と実験研究を巧みに結びつけている点にある。調査研究によって特性を把握することは可能であるが、実際にそのような特性が行動にどのように結びついているのかを知るためには実験は不可欠である。しかし多くの研究者が実験あるいは調査だけを行うことが多い中に、著者は調査を実験によって裏付けするという手法をとることで、より説得力の高い論文とすることに成功した。加えて、実験によって明らかになった認知処理プロセスからは、優柔不断な人の心理的な諸特徴（例えば、優柔不断な人は単純に決定が遅いのではなく、決定するための情報を集めようとするために反応が遅くなる、あるいは判断を回避するために反応が遅くなる、というように様々なプロセスにおいて反応が遅くなる可能性がある）を明らかにした上で、プロセスを包含するモデルが提示された点も特筆に値する。

また、本論文は優柔不断な人々の適応についても焦点が当てられているが、このことは本研究が社会に貢献できる可能性を持っていることを意味している。検討からは、優柔不断な人は自己効力感が低く、決定においてストレスを感じる傾向が強いことも明らかとされたが、このことは優柔不断を単なる個人特性として理解するだけではなく、支援の対象となる可能性が高いことを意味する。すなわち、作成された尺度によって抽出された人々の中には支援を必要とする人々が含まれていることを意味し、さらに先のプロセス研究から導き出された特徴を理解することによって、そのような人々の支援に結びつく可能性がある。今後の研究の発展に期待したい。

本研究は、学位申請論文として非常に高い水準にあるものであり、学位を認定するにあたって問題ないものと判断する。その上で、さらに今後の研究に活かしてもらいたいという意味でいくつかのコメントを付け加えたい。まず、本研究の因子分析で抽出された因子についてであるが、因子間の相関の高さや因子数抽出までのステップで苦労した点などを勘案すると、因子分析以外の研究で

実施したデータを用いて確認的な因子分析を行うことが望まれたであろう。これを実施することによって、当初に確立された因子がより強固なものとなったと考えられる。同様に、既存の不決断尺度と作成された優柔不断尺度の関係性が明らかにされていない。過去の研究との比較が可能となることから、両者の関係を明瞭にすべきであった。また、実験的な困難が予想されるが、抽出された「他者参照」についても実験的な裏付けがあると、より説得力のある論文となったと思われる。加えて、作成された尺度の因子を用いてクラスター分析などにより対象者の分類がなされると、対象者の理解や支援への一助となると思われる。これらの点をさらなる研究において活かしてもらえたらと思う。

なお、以上の指摘は今後の研究を進めるにあたって解決あるいは対応されるべき点であり、本論文の評価そのものを低めるものではないことを付け加えておく。

最終試験は、2017年1月13日に行われ、試験終了後、審査委員会は一致して斎藤聖子氏への博士（心理学）の学位授与を承認した。